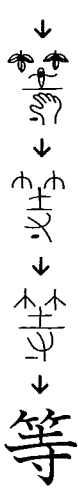


等

三年

回数 12
筆順 等 等
オン トウ
クン ひとしい

成り立ち



「やくしよ」のいみをあらわした「寺」と、やくしよの「書るい」のいみをあらわした「等」とを組み合わせた字で、「やくしよの「書るい」といういみの字です。かみがまだなかったむかしは、「竹のふだ（簡）」といいました。がつかわれましたので、「等」が書るいのみをあらわすのです。

やくしよの書るいは、「いつもじゆんじよ」よく、きちんとせいりされていますので、「じゆんじよ」といういみにつかわれ、「二等、三等……」という「等級」をあらわす字になりました。

また、等級をつけるときには、「ひとしい」ものをまとめるので、「ひとしい」といういみにつかわれるようになりました。

使い方

▽三人で千円もらいましたが、均等に分けることができなないので、百円だけおかしを買って分けあい、のこりの九百円を等分しました。

▽きょうそうで三等まではしようがもらえますが、等外はもらえません。

熟語例

▽均等(均(5690)も「ひとしくする」といういみ。ひとしくて差がないこと。)

▽等分(等しく分けること。量などが等しくなるように分けること。)

▽等級(ものごとに二等二等三等というように階級をつけて、じゆんじよをつけること。また、その「じゆんじよ」のこと。)

▽等外(きめられた等級、またはじゆんじよから外れること。この例では、「二等二等三等以外」のこと。)

▽上等(等級が上であること。ものがすぐれていること。また、「上の等級」といういみ。◎「下等」)

▽高等(等級が高いこと。ものていどが高いこと。◎「初等」)

動

三年

回数 11
筆順 ニ 音 重 動
オン ドウ
クン うごこりかす

成り立ち



「重い」といういみの「重」と、腕の形をあらわし、力(腕力)「年」のいみをあらわした「力」とを組み合わせて作った字で、「重いものでも力を出せば動く」ということで、「うごこ」。「うごかす」といういみをあらわしたものです。

「人の動き」といういみで、「人の行い」のいみにつかわれます。◎言動、挙動。

また、「じけんがおこる」といういみにつかわれることがあります。◎騒動、暴動、動因、動機。

三三八

使い方

▽むかしの人は、わたしたちの住んでいる、この地球は動かず、太陽が地球のまわりを回っていると考えていました。けれど本当は、地球が太陽のまわりを回っているのです。

▽へやのようがえをすることになり、机や本などを動かしました。今までより、ずっと使いやすくなりました。

熟語例

▽移動(移り動くこと。位置を変えること。「太陽が移動するにつれて、ものの影も、位置を変える」などというふうな、つかいます。)

▽言動(言葉と行い。「人の言動を見ると、その人柄がわかる」などというふうな、つかいます。)

▽挙動(ふるまい。行い。「挙動がやらしい男」などというふうな、つかいます。)

▽騒動(騒ぎや事件。「むかしは、きさんのために米が不足して「米騒動」がおこった」などと、つかいます。)